

大野一雄論——身体とエクリチュール

宮川麻理子（立教大学）

本発表は、2020年に受理された博士論文「大野一雄論——身体とエクリチュール」に基づく。舞踏家・大野一雄（1906-2010）の名は、「舞踏」の創始者として認知されている。しかし「魂」や「即興」という枕詞に覆われ、大野の身体性や作品制作の方法論は明らかになっていない。本研究ではまず、大野の身体が形成される過程を、大野が体験した20世紀の身体文化（体操およびパントマイム）から着想を得た身体観を中心に論じ、心身の結びつきを重視するソマティクスに近似した思想を明らかにする。例えば1955年に指導したマス・ゲームの資料からは、視線や姿勢への細かな言及など、後年の大野に共通する要素が見出される。1960年に書かれたテキストでは、目の表現の重要性や理想的な姿勢を論じ、J=L・バローの演劇論を引きながら、歩行と重力処理について思索している。これらが、大野の舞踏の身体・運動の核となっていることは、この独自の姿勢、視線、重心操作が1990年の稽古映像にも見られることから明らかである。

ついで、大野が1977年以降作品を制作する際にとった方法論を、創作ノートを中心に検討した。まず《わたしのお母さん》の創作ノートに見られるように、土方巽の舞踏譜の痕跡が記録されている。大野は、自身の記憶、および折口信夫の『死者の書』からの引用を、土方の言葉と混成する形でノートに書き、イメージを重層的に構築した。《ラ・アルヘンチーナ頌》の創作ノートにおいては、江口隆哉の舞踊創作法の影響を残す「踊跡」や、動きのダイナミズムを描き出すデッサンの中に、そして他者の記憶や批評の言葉によって練り上げられたテキストの中に、準拠枠に相当する「振付」の痕跡が見られる。

土方の死後制作された《睡蓮》からは、大野の舞踏の訓練とは、言葉によって身振りに先行する情動へ働きかけ、テキストの中で運動・知覚をシミュレートすることであると明らかにした。本作で大野は、「見えない」視覚の状態に関心を持ちながら、知覚や運動に関するテキストを書く。言葉は、ソマティクスにおける言語作用を分析したゴッドフロワに依拠すれば、身振りを生み出す地へと働きかける（Godfroy, 2018）。したがってテキストは、踊る身体を豊かにする知覚訓練の場となり、大野はテキストを書くことで、理想の踊りを探究していたと考えられる。